

靖国宮司の天皇批判

伊藤智永・編集委員兼論説委員

2018年10月20日



未明の靖国神社 = 2013年12月23日、筆者撮影

「天皇の神社」とも言われる靖国神社の小堀邦夫宮司（68）が「天皇陛下は靖国を潰そうとしている」という発言を暴露されて辞任することになった。同じ時期、全国8万神社を包括する宗教法人・神社本庁の田中恆清（つねきよ）総長（74）が、役員たちから運営を批判されて辞任を表明。こちらは前言を翻し続投の構えだ。小堀氏は靖国神社の有力総代である田中氏の推薦で半年前、宮司に就いた。次の宮司も、本庁元幹部が有力候補だ。二つの事件に、どんなつながりがあるのか。

＜A級戦犯合祀で靖国は変わった＞

＜靖国神社＞「合祀問題」いったん宮司預かりに

＜時の在りか＞伊藤記者による姉妹コラム

〈なぜ「平成のうちに」〉オウム処刑と天皇制

小堀発言は「週刊ポスト」（10月12・19日号）がスクープした。同誌によると、発言は6月20日、神社内の会議で職員たちを前に飛び出した。録音がネットに公開されている。



小堀邦夫氏

「陛下が一生懸命、慰霊の旅をすればするほど靖国神社は遠ざかっていくんだよ。そう思わん？ どこを慰霊の旅で訪れようが、そこには御霊（みたま）はないだろう？ 遺骨はあっても。違う？（中略）はっきり言えば、今上陛下は靖国神社を潰そうとしてるんだよ。分かるか。

（退位まで）あと半年すれば分かるよ。もし（天皇が）ご在位中に一度も親拝（参拝）なさらなかったら、今の皇太子さんが新帝に就かれて参拝されるか？ 新しく皇后になる彼女（皇太子妃雅子さま）は神社神道

大嫌いだよ。来るか？」

靖国神社は確認を拒んでいたが、10月10日「極めて不穏当な言葉遣いの録音内容が漏洩（ろうえい）いたしました」という広報文を無言で報道各社へファクス送信した。小堀氏が宮内庁を訪れ陳謝し、退任の意向を伝え、後任は10月26日の総代会で決めるという。会合も発言も事実らしい。靖国関係者によると、小堀氏は陳謝後も「間違ったことは言っていない。悪いのは漏らした奴だ」と祭祀を務めていたが、さすがに天皇の勅使（お使い）を迎える17～20日の秋季例大祭を前に自宅謹慎となったそうだ。



創立百年記念大祭が行われている靖国神社を参拝のため訪れた天皇皇后両陛下 = 東京都千代田区の靖国神社で1969年10月20日撮影

靖国は明治以来、天皇の命令で戦い、死んだ者たちを神として祭る。昭和天皇は戦後も参拝していたが、1975年を最後に中止した。戦死ではない東京裁判刑死者たちが祭られたこと（A級戦犯合祀=ごうし）に納得できなかったからだ。今の天皇も先代の意向を踏襲してきた。それが不満な靖国は、首相参拝の実績を積み重ねて天皇参拝を復活させようとしてきたが、うまくいっていない。来年春、天皇の代替わりの2カ月後、靖国は創建150年を迎える。焦りが、天皇への恨み言となって出たらしい。だとしても、たとえ内部の会議とはいえ宮司がそれを口にしたら、靖国の自己否定となり、身もフタもない。粗暴な「言葉遣い」も今の社会常識ではパワハラすれすれだ。

そうした問題点を押さえた上で、あえて発言の論理をたどると興味深い。まず、慰霊の旅の否定だ。世論の大半が評価する営みを、小堀氏は戦没者慰霊の本筋（靖国参拝）から外れ、目をそらし、ついには靖国を有名無実な施設に陥れかねない行動として非難する。極論に聞こえるが、今の天皇と靖国の関係が続けば、確かにそうなるかもしれない。つまり、小堀氏は「天皇VS靖国」という悪夢を見通している。会合で次のようにも言った。

「（一昨年夏の）ビデオメッセージで譲位を決めた時、反対する人おったよね（中略）正論なんよ。だけど正論を潰せるだけの準備を陛下はずっとなさってる。それに誰も気がつかなかった。公務というのはそれなんです。実績を陛下は積み上げた。誰も文句を言えない。そしてこの次は、皇太子さまはそれに輪を掛けてきますよ。どういうふうになるのか僕も予測できない。少なくとも温かくなることはない。靖国さんに対して」

天皇は生前退位の意向を国民向けに直接語るビデオで述べられた（適宜中略）。

「私は天皇の務めとして祈ることを大切に考えてきましたが、同時に象徴としての役割を果たすためには、国民に理解を求めると共に、天皇も国民に対する理解を深める必要を感じてきました。こうした意味において、日本の各地、とりわけ遠隔の地や島々への旅も天皇の象徴的行為として大切なものと感じてきました」

海外慰霊の旅も、この延長にある。象徴が象徴であるためには、憲法で定められた国事行為と政府に与えられた公的行為だけでなく、独自に創造し、試行し、挑戦するさまざまな象徴的行為を蓄積することが、新たな平成の象徴天皇像を作り上げ、人々に認められ、ソフトな権威を確立する。そうして獲得した権威は、靖国参拝を見送り続ける天皇の判断を賢明な配慮と肯定する世論の支持を固めてきた。「積極的象徴天皇制」である。

譲位に反対した人とは、政府の有識者会議に呼ばれた右派論客たちのことである。



「ご自分で定義し、拡大された天皇の役割を絶対条件に、それを果たせないから退位したいというのはちょっとおかしい」（平川祐弘東京大学名誉教授）

「天皇の仕事は宮中にいて祈ること、国民の前に姿を見せなくても任務を怠ることにはならない」（渡部昇一上智大名誉教授＝故人）

つまり「積極的象徴天皇制」反対論だ。小堀氏は、その主張を「正論」と考えている。

しかるに、天皇はそうした批判をもちろん承知されている。だからここの際、国民に考えてほしいと訴えたお言葉の表題は「退位の希望について」ではなく、「象徴としてのお務めについて」となっていたのだ。



「象徴としてのお務め」についてお言葉を表明される天皇陛下のビデオメッセージは街頭ビジョンにも映し出された＝東京都新宿区で2016年8月8日、竹内紀臣撮影

慰霊の旅で、約1200人の日本人が亡くなったアンガウル島に向かって拝礼される天皇、皇后両陛下＝パラオ・ペリリュー島で2015年4月9日（代表撮影）

人々が車内だけでなく歩行中、食事中でも何らかの「画面」を凝視しているような現代社会のコミュニケーション、認識レベルを考えれば、積極的に国民との相互交流を試みる天皇でなければ、象徴でいることは現実に難しいだろう。なのに、そうすべきでない天皇像とは、詰まるところ象徴天皇否定論に向かっていくだろう。天皇元首論である。右派の正統な考え方としては筋が通っている。靖国の広報文が「言葉遣いが不穏当」としながら、内容についてコメントせず、小堀氏が宮内庁に「何を、なぜ」陳謝したのかあいまいに

しているのも、実は小堀氏の考えを正面切って否定できないからだろう。

小堀氏は伊勢神宮の筆頭祢宜（ねぎ）まで務めたベテランで、2013年に行われた20年に1度すべての社殿を建て替える式年遷宮の広報副本部長の一人だった。広報本部長は神社本庁の田中総長である。今年2月、靖国の徳川康久前宮司が「一身上の都合」で定年前に退任した。メディアでの「賊軍合祀論」が責任役員の不興を買った事実上の解任とも言われたが、他に神社の内情も絡んでいたようだ。

旧華族の親睦団体「霞会館」は後任の推薦を断り、困った靖国が神社本庁に頼んで、伊勢を定年退職していた小堀氏に白羽の矢が立った。田中氏が人選に無関係なはずがない。むしろ「独特の理論家でもある小堀氏なら、天皇と靖国の冷却関係を打開する戦略をひねり出すかもしれないと期待したのでは」（神社関係者）ともいわれるが、裏目に出た。結果的に、田中氏も面目を失した。

それだけでなく神社本庁が関与する有名神社の宮司人事については、昨年12月の東京・富岡八幡宮の殺人事件といい、裁判になった大分県の宇佐神宮といい、各地でトラブルが目立つ。田中氏の退任騒動は、本庁職員の社宅を売った不明朗な不動産取引を巡る内部の突き上げに音を上げながら、「盟友の打田文博神道政治連盟会長らに活を入れられて気を取り直し」（本庁関係者）、10月24日の本庁評議員会を乗り切り、退任白紙化を目指しているようだ。10月22日付神社新報で鷹司尚武統理は「然るべき時期に辞表の提出があるものと思ふ」と促しているが、さてどうするか。



宗教法人・神社本庁の田中恆清総長

靖国の広報にしては異例な小堀氏辞任の素早い報道発表は、田中氏が自らへの退任圧力になりかねない火の粉を払う効果が読み取れる。二つの事件は、意外な地下茎でつながっていると見るべきかもしれない。

皆さんはどう感じますか？コメントをお寄せください

投稿フォームはこちら

※本コメント機能はFacebook Ireland Limitedによって提供されており、この機能によって生じた損害に対して毎日新聞社は一切の責任を負いません。また、投稿は[利用規約](#)に同意したものとみなします。

前の記事

なおみフィーバーの後で

プロフィール

伊藤智永

編集委員兼論説委員

記者歴30余年。平成の日本政・官界を担当してきた。ジュネーブ特派員として2010年、アラブ民主革命やギリシャ経済危機の現場を歩く。毎日新聞にコラム「時の在りか」連載中。著書に「靖国と千鳥ヶ淵」（講談社+a文庫）「忘却された支配」（岩波書店）他。

